

ルイ＝フェルディナン・セリーヌの工学的エクリチュール ——セリーヌとル・コルビュジエのアメリカ

彦江智弘（横浜国立大学）

いずれにせよ、彼は病院の入口に洗面台を設け、臨産医に検査ないし触診を行う前には、入念に手を洗うよう学生たちに命じたのである。

ルイ・デトウーシュ『ゼンメルヴァイスの生涯と業績』¹

1. エクリチュールの都市工学的側面

セリーヌのエクリチュールには工学的側面がある——これが本論考の出発点となる作業仮説である。

はたしてこのような仮説は『夜の果てへの旅』の作家を論じるにあたっても奇異に映るだろうか。だが「工学」という語が基礎科学を応用し、生産性や利便性の向上にせよ、安全性や効率性の改善にせよ、何らかの問題の解決をデザインし実行する実践的知の形であると捉えるならば、「工学的」という形容はセリーヌのエクリチュールにとって決して突飛なものではないはずだ。実際、セリーヌは『Y 教授との対話』において自身の「感動的表現 *rendu émotif*²」の文体について「ささやかな発明だけだね……でも実用的なんだぜ！……自在式カラー・ボタンとか……自転車の二段式ギアとかのようにね……」[501; 200] と語り、自身についても「^{プラネート}地球のために^{コギト}思惟に耽るなんてことはしない！……ほんのちっぽけな発明家にすぎない」[498 ; 196] ことを強調する。確かにこのような主張には、第二次世界大戦前夜から戦中にかけて反ユダヤ主義の言説を弄したことを中和しながら自身の文学を再定義しようとする戦略が見え隠れする。だがその一方で、セリーヌがすでに『夜の果てへの旅』出版の段階で自身の文体を説明するにあたって「発明」という言葉を持ち出していることにも注意を向けておきたい。『旅』出版後のあるインタビューにおいてセリーヌは次のように述べている。「私はアンチ・ブルジョワの言語を発明した、この言語は私の目論見にも適うものだ。なぜならこの言語なしでは見つけることのできなかつただろう感情というものがあるからだ³」。さらにセリーヌが「発明家」

¹ Louis Destouches, « La vie et l'œuvre de Philippe Ignace Semmelweis (1818-1865) », *Cahiers Céline*, 3, Gallimard, 1977, p. 47 (c'est nous qui soulignons). [セリーヌ『ゼンメルヴァイスの生涯と業績』浅井喬男訳、『セリーヌの作品 12』国書刊行会、1982 年、307 頁、傍点引用者] 本論考では翻訳が存在するものは、基本的に既訳を使用させていただいた（一部語句を修正した箇所がある）。訳者の方々に御礼申し上げる。

ルイ・デトウーシュはセリーヌの本名。ただし以下の本文では、煩雑になるのを避けるため小説家となる以前の活動やテキストについてもセリーヌで統一する。

² Louis-Ferdinand Céline, *Entretiens avec le professeur Y, Romans*, t. IV, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1993, p. 500. [セリーヌ『Y 教授との対話』浅井喬男訳、『セリーヌの作品 12』同上、199 頁]

以下では『Y 教授との対話』と『夜の果てへの旅』からの引用は本文中で原著・邦訳の順で出典のページ数のみ示す。 *Voyage au bout de la nuit, Romans. 1932-1934*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2023. [『夜の果てへの旅』上下巻、生田耕作訳、中公文庫、2003 年]

³ « Propos recueillis par Robert de Saint-Jean », *Cahiers Céline*, 1, Gallimard, 1976, p. 51.

としてのアイデンティティを強調する背景として、アンリ・ド・グラフィニことラウル・マルキとの出会いも見逃すことができない⁴。マルキはセリーヌが 23 歳の年にカメルーンから帰国した後にパリで出会った発明家兼作家で、実に 140 冊以上の実用科学の啓蒙書を出版している。おおよそ半年ほどのこととはいえマルキの下で下働きを経験したセリーヌは、マルキをモデルに『なしくずしの死』の後半の主要人物となるあの発明狂のクールシアル・デ・ペレールを造形するだろう。このマルキの存在はセリーヌの文学世界における工学的な古層を形成していると言いうるはずだ。

ここでは『Y 教授との対話』においてもう一点だけ注意を促しておきたい。それは自身が発明家であるにすぎないと強調するだけでなく、セリーヌが自らの発明である「感動的表現」の文体を説明する際に引き合いに出すのが他でもない「地下鉄」だという点である。「感動の地下鉄、我が地下鉄さ！」

[536; 244]。もちろんこの「感動」を捉えるための手段が「書き言葉を通しての話し言葉」[537; 245]である。ところでなぜ地下鉄なのだろうか？ そもそも地下鉄とは一体なんであるのか？ それはたんなる移動手段である以前に、様々な高度な科学上の成果が組み合わさって成立する機械装置であり、都市交通の問題を解決に導くためにデザインされた交通網の整備に他ならない。これを踏まえるならば、セリーヌのエクリチュールはたんに工学的というだけでなく、より正確には都市工学的——すなわち都市計画的——と言いうる側面を備えているのではないか。

その一方でひとりの作家のエクリチュールには様々な様相があり、それらがその都度響き合いの度合いを変えながら作品が生成されるのだとしたら、ここで私たちが問題とする工学的側面がセリーヌのエクリチュールにおいてどのように位置づけられるのかも見ておく必要があるだろう。上に引いた発言にあるとおり、セリーヌは『旅』の段階から独自の言語を発明したことを自負しているのだが、これはすなわちセリーヌが自身のエクリチュールの問題に作家活動の初期から意識的だったことの証左であろう。セリーヌに自身のエクリチュールが作動する瞬間をテキストの内部で演出する傾向が見られるのはおそらくそのためだ。もっとも典型的なのがセリーヌの 2 作目の小説作品である『なしくずしの死』である。この自伝的性格の作品はセリーヌの少年期に取材していることで知られるが、「ことの起こりはこうだ」[7; 上 7] という一文によって始まる『旅』とは異なり、物語の本体は出し抜けに語り始められることはない。まずは語り手である主人公フェルディナンの現在の描写に 30 ページほどが費やされている。そこで語られるのは医者であり作家活動も行っているフェルディナンの陰鬱な日常であるが、ひとつの軸をなしているのが、「クロゴルド王の伝説」と名付けられた中世を舞台とする作品の草稿を同僚に語って聞かせようと奔走する一連のエピソードである。しかし様々な障害のためにこれをうまく果たせず、フェルディナンは最終的に錯乱を起こし、ようやく彼の少年時代の物語が語り始められるという筋立てになっている。このように自身の小説世界とは多少なりともかけ離れたテキストが不可能なことを作品中で演出することで、セリーヌは自らのエクリチュールの来歴をテキストに書き記そうとしているのではないかと⁵。セリーヌはこのような演出を他にも『皆殺しのため

⁴ マルキについては以下を参照のこと。François Gibault, *Céline*, Bouquin, 2022, p. 149-159.

⁵ この問題には以下ですでに取り組んでいる。Tomohiro Hikoe, *Roman et récits légendaires et populaires chez L.-F. Céline*, thèse, Université Paris IV, 2004.

の戯言』で繰り返している。そこではバレエの台本が「クロゴルド王の伝説」の役割を果たし、その頓挫がトリガーとなって反ユダヤ主義の言説が溢れ出すことになる。

さらに驚くべきことに、2022年に公となった新たな草稿群でもこのような断絶の演出が繰り返されている⁶。まず目を引くのは、『なしくずしの死』と三部作をなす予定だった『戦争 *Casse-pipe*』と『ギニョルズ・バンド』に関わる草稿だけでなく、『クロゴルド王の野望』というタイトルの下にまとめられた草稿が存在することだ。もちろんこれは『なしくずしの死』の冒頭で断片的に語られた「クロゴルド王の伝説」に関わる草稿である。このような草稿が実際に存在していることは『なしくずしの死』の冒頭部分で施された演出が完全なフィクションではないことを示唆するものであるはずだ。だがもっとも目を引くのが、『戦争 *Guerre*』というタイトルの下にまとめられた草稿である。意外なことにも、ここでもほとんど『なしくずしの死』と同じ演出が繰り返されているのである。戦傷を負ったフェルディナンの野戦病院での生活を描き出すそのエピソードの冒頭は、負傷したフェルディナンを前線から連れ戻す列車の描写に当てられているのだが、そこでフェルディナンは朦朧とした意識のなかどうしたわけか『クロゴルド王の野望』の断片を語ろうとする⁷。だがここでもそれは結局成就せず、野戦病院のエピソードが語り始められるという演出が施されている。このエピソードが『夜の果てへの旅』前後の執筆計画においてどのように位置づけられていたのかは今のところ定かではない。だが草稿においても観察される、「クロゴルド王の伝説」やバレエ作品などシリーズの小説世界と一定の隔たりのあるテキストが不可能なことを作品に織り込むこのような手続きの反復は、すでに述べたとおり、シリーズによるエクリチュールの「発明」がこのような断絶の上に成立していることを示唆しているのではないか。今回発見された草稿群の読解のひとつの軸は、このようなシリーズのエクリチュール成立の問題でもあるはずだ。

だがこのような演出はシリーズのエクリチュールがいかなる断絶に動機づけられているのかを示唆するにしても、シリーズが発明したというエクリチュールがどのように生成されたのかはまた別に問わなければならない問題であろう。そこで注目したいのが、私たちが工学的と呼ぶことを提案するシリーズのエクリチュールのひとつの側面である。つまり『Y 教授』で語られるエクリチュールの発明と地下鉄との関連付けが、『なしくずしの死』における「クロゴルド王の伝説」の失敗と裏表一体となっていると捉えるのが私たちの基本的な立場である。

本論考ではこのような観点から以下の章でシリーズのエクリチュールの工学的側面の諸相——とりわけ都市計画的側面——を浮かび上がらせることを目指す。その際に『Y 教授との対話』のみならず、『夜の果てへの旅』や『皆殺しのための戯言』等のテキストを検討することになるだろう。これに取り組むにあたって、本論考ではたんにシリーズのテキストのみを取り上げるのではなく、同時代の都

⁶ 新たに発見された草稿については以下を参照のこと。森澤友一朗「訳者解題」シリーズ『戦争』森澤友一朗訳、幻戯書房、2023年、229-265頁。杉浦順子「ルイ・フェルディナン・シリーズの発見された草稿をめぐって」『広島修大論集』第65巻、第1号、2024年、1-21頁。

⁷ なお『クロゴルド王の野望』の断片は、今回出版された草稿のひとつである『ロンドン』にも登場する。

Véronique Chovin, « Avant-propos », Céline, *La Volonté du Roi Krogold*, Gallimard, 2023, p. 20-25.

市計画家・建築家であるル・コルビュジエとセリーヌの対比を試みたい。本人がどれほど意識していたのかはさておき、19世紀末に生まれ、両大戦間期に作家活動を始め1960年代初頭に没したセリーヌは、社会の産業構造の転換を背景に都市と建築についての考えを刷新し、独自のコンセプトに基づいて実際に都市に介入しようとしたこのモダニズムの建築家・都市計画家と同時代を生きた。しかしル・コルビュジエとセリーヌが実際に出会ったわけではない。二人がお互いのことに言及した資料も存在してはいない。だがふたりには接点がある⁸。本論考では、このような接点のひとつを探りながら、たんにセリーヌのエクリチュールの都市計画側面に光りをあてるだけでなく、これを同時代に工学的知を更新しながら都市への介入を模索していたモダニズムの都市計画に対して位置づけることを試みたい。

2. デトロイト

セリーヌとル・コルビュジエの接点を炙り出すためには、まずは作家としてデビューする前のセリーヌのキャリアに遡らなければならない。セリーヌは戦傷のため第一次大戦から復員した後、紆余曲折を経て医学の道に進むことになる。1924年には博士論文を提出。テーマは、産褥熱対策としてパストール以前に手洗いによる消毒を唱えたことで知られるハンガリーの医師ゼンメルヴァイスだった。だがこの博士論文により医師資格を取得したセリーヌは、直ちに『夜の果てへの旅』で描かれるような場末の開業医になったわけではない。セリーヌが向かったのはジュネーヴである。国際連盟保険機関に専門職員として採用されたからに他ならない。配属されたのは国際連盟事務局保健部だった。この保健部を指揮していたのが、国際連盟保険機関の常設機関化に尽力したルドヴィッヒ・ライヒマンである——セリーヌはこのライヒマンを『夜の果てへの旅』以前に執筆した戯曲『教会』において戯画的に描き出すだろう。国際連盟保険機関は保健衛生における国際協力の必要性が高まるなか1923年に常設機関化された組織で、各国で必要性が高まっていた保健衛生の問題に国際協力の枠組みを提供し、これを合理化しさらに促進することが目的とされていた。そのため国際連盟保険機関では従来の伝染病対策だけでなく、医薬品の標準化、統計データの整備、専門家の国際交流活動の促進などが

⁸ セリーヌとル・コルビュジエとの関連付けは、すでに以下の研究でも行われている。Philippe Roussin, *Misère de la littérature, terreur de l'histoire. Céline et la littérature contemporaine*, Gallimard, coll. « NRF essais », 2005, p. 84-140. ここでルーサンが着目するのが、本論において私たちも確認するように、作家になる以前に医療従事者としてのセリーヌが抱いていたフォーディズムへの肯定的な関心である。ルーサンはこれをサントラールやレジェのような作家や芸術家もフォーディズムを評価していたという1920年代の状況に置き直すのであるが、その際に大きく取り上げられるのがル・コルビュジエである。なぜこのような選択がなされたのか？ その理由は、ル・コルビュジエが30年代の初頭に接近するネオ・サンディカリストのグループがイタリアのファシズムやスターリンの計画経済を評価していることを踏まえ、フォーディズムへの注目から全体主義へという筋書きを導き出すことにあるように思われる (p.138)。もちろんここからセリーヌもこのような筋書きをおおよそ辿ったのだという見立てが成立することになる（なおルーサンは、これが行き詰まったことで小説作品の基底となる治癒不可能な人間性の病というヴィジョンに至ったと結論する）。一方、これから見るように、私たちがセリーヌとル・コルビュジエを接近させるのは、医学テキストのみならず小説作品の分析を通じてむしろル・コルビュジエの都市思想との差異を明らかにし、セリーヌのエクリチュールの工学的側面に光を当てることにある。

推し進められた。セリーヌが配属された国際連盟事務局保健部は企画立案された業務の遂行を主に担っていた。つまりセリーヌは、後にフーコーが生権力と呼ぶような問題圏に位置づけうる、治療よりもむしろ管理に重点をおく医療実践の最前線にいたのである⁹。実際、セリーヌが担当した事業のひとつは、南米の医療従事者たちに帯同し、北米とヨーロッパにおける公衆衛生と産業医学の現状の視察を行うことだった。またその際にセリーヌ自身デトロイトのフォード社における病者や障害者の活用についての報告書をまとめている。セリーヌはこの国際連盟保険機関に 1924 年から 27 年まで在籍することになるだろう。

このようにセリーヌは国際連盟保険機関の専門職員として初めてアメリカの地を踏んだのであるが、このアメリカこそが、本論考において取り上げたいセリーヌとル・コルビュジエの接点に他ならない¹⁰。1925 年 2 月から 6 月まで続いたこの視察旅行でセリーヌが得たアメリカについての知見は主に上司であるライヒマンに当たった書簡と報告書によって窺い知ることが可能である。これらの資料や後の医学テキストを繙けば、医療従事者としてのセリーヌがアメリカに対して肯定的な関心を寄せていたことが分かるだろう。ところが当時のフランスには 19 世紀から続く反米思潮が形を変えてなおも広まっていた。フィリップ・ロジェの『アメリカという敵』に従えば、19 世紀から続くフランスにおける反米主義の言説の担い手は両大戦間期には主に知識人が占めるようになり、そのコーパスもエッセイやルポルタージュから小説にいたる様々なジャンルへと広がっていく¹¹。もとよりマンハッタンの激しい都市の情景とデトロイトのフォード社での過酷な労働の実態を描き出すセリーヌの『夜の果てへの旅』も、この両大戦間期の反米主義の新しい流れに位置づけられるのはいうまでもないだろう。ロジェは両大戦間期の反米主義のピークを 1922 年から 1932 年と定めているのだが、『旅』は 1932 年のベストセラーのひとつだった。つまり『旅』以前のセリーヌはむしろフランスの反米主義の例外であったのだ。それではセリーヌはアメリカに対してどのような肯定的評価を下していたのであろうか。

すでにふれたように、セリーヌは北米視察旅行の一環でデトロイトのフォード社を視察している。そこで社会衛生の専門家としてのセリーヌが目撃したのは、フォーディズム体制における病者の取り扱いであった。セリーヌは北米旅行の途上で作成したレポートに例えば次のように記している。「周知のとおり、フォード社の工員の作業はたいへん単純化かつ専門化されているため、機械のまわりで一つか二つの動作を繰り返せば」よく、「他社の工場では工員が個人としての価値を依然として有している」が、「フォード社では誰もが他の工員に代わってどんな作業をこなすことも可能である¹²」。すなわち製品の規格化 *standardisation* を推し進めることで作業が単純化された量産工程 *en série* においては、労働者はもはや個人としての価値を失うばかりか、健常者だけでなく病者や障害者を労働者として雇

⁹ この問題を取り上げた論考に以下がある。Hervé Couchot, « Céline et le bio-pouvoir : quelques perspectives de lecture », *Pesanteur et féerie : actes du Treizième Colloque international Louis-Ferdinand Céline*, Société des études céliniennes, 2001, p. 97-112.

¹⁰ もうひとつの接点はジュネーヴであるが、これについては稿を改めたい。

¹¹ フィリップ・ロジェ『アメリカという敵 フランス反米主義の系譜』大谷尚文・佐藤竜二訳、法政大学出版局、2012 年、446-450 頁。

¹² « Note sur l'organisation sanitaire des usines Ford à Detroit », *Cahiers Céline*, 3, *op.cit.*, p. 121-122.

用するという道が開かれる。セリーヌは実際にフォード社における障害者の雇用の様子を描写しているのだが、病者や障害者を労働の現場から切り離すのではなく、極端に単純化された作業をこなす労働力としてむしろ積極的に活用する様から強烈な印象を受けたようだ。言うまでもなく、労働にすべてを適合させ包括しようとするこのような労働者観は反米主義の言説を起動させる主題になりうるものである。実際、『夜の果てへの旅』ではデトロイトのフォード社は以下のように描写されることになる。

うつむいて機械のご機嫌とりに余念ない職工たち、見ているだけでも、むかつくながめだ。機械の前にただ次から次と口径ボトルを手渡すだけ、この油の匂い、喉を通って鼓膜を、耳の中を焼きこがすこの蒸気の中で、いつまでも辛抱強く。連中が頭をたれているのは、恥ずかしいからじゃない。戦争に降参するみたいに騒音に降参しているのだ。[217-218 ; 362]

だが 1925 年の北米視察旅行におけるセリーヌの関心はあくまでも産業を基盤に社会衛生を再構築する途を探ることにあり、フォード社の労働の実態に対して驚きこそせよ、これを退けることはなかった。そもそもデトロイトを訪問する前にニューヨークからライヒマンに書き送った書簡には次のように記している。「衛生学は産業的なものになりつつあります。これは労働者のよりよい生産性の問題です。それ以上のものではありません。／衛生学は金をもたらすのです¹³」。セリーヌにおける医学の問題に取り組んだダヴィッド・ラブルールの研究に従えば、このようなフォーディズムへの関心自体に第一次世界大戦後の労働力の回復に社会衛生を役立てるという問題意識があったという¹⁴。だが社会衛生によって強化されたフォーディズムをフランスに移植するというこのような目論見は現実のものとはならず、ジュネーヴを去ったセリーヌはクリシーの無料診療所の勤務医となるだろう。その一方で、例えば 1930 年に「無料診療所におけるある種の患者の量産型の診断と療法の試み *Essais de diagnostic et de thérapeutique en série sur certains malades d'un dispensaire*」と題した発表をフランス医学会で行い¹⁵、国際的な衛生学教育講座の必要性を説く 1932 年の「高等研究講座のための報告書」にも「規格医療 *médecine standard*¹⁶」という表現が見られるなど国際連盟を辞して以降の医学テキストにもフォード社への言及が依然として散見される。これを踏まえれば、フォーディズムと社会衛生を関連付けるという着想は医療従事者としてのセリーヌに深く根を下ろしていたことが分かるだろう。しかもこれらのテキストが書かれたのは上に引いたフォード社の批判的描写を含む『夜の果てへの旅』を準備している時期でもあった¹⁷。つまりこの時期、セリーヌはアメリカに対して二重の眼差しを向けてい

¹³ Lettre à Ludwig Rajchman du 5 avril 1925, *Lettres*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2009, p. 268.

¹⁴ David Labreure, *Céline. Le médecin-écrivain*, Bartillat, 2023, p. 96. 以下も参照のこと。Philippe Roussin, *op.cit.*, p. 114-117.

¹⁵ *Cahiers Céline*, 3, *op. cit.*, p. 170-177. 強調は原文。

¹⁶ « Mémoire pour le cours des hautes études », *ibid.*, p. 196.

¹⁷ 『旅』の執筆時期は 1929 年から 1932 年と推定されている。Henri Godard, « Notice », *Romans. 1932-1934*, *op.cit.*, p. 1133.

たのである¹⁸。

その一方で、ル・コルビュジェにとってアメリカとはどのような対象であったのだろうか？ ル・コルビュジェとアメリカとの関係として真っ先に挙がるのは、言うまでもなく 1937 年に出版された『伽藍が白かったとき』である。これは 1935 年に 2 ヶ月に亘って滞在した際のアメリカ紀行であり、これがル・コルビュジェの初めてのアメリカ体験だった。しかし参照項としてのアメリカはこれよりはるか以前の 1920 年代初頭に遡る。しかもより具体的には、関心の中心はフォーディズムにつながる科学的な生産マネジメント様式であるテイラリズムにあった。すでに 1917 年に拠点をパリに移していたル・コルビュジェは、1920 年代に『レスプリ・ヌーヴォー』誌を創刊するのだが、そこではアメリカの大量生産システムに関わる図版が度々用いられていた¹⁹。この傾向は 1923 年に刊行された『建築へ』ではより鮮明なカタチで現れることになるだろう。『建築へ』は近代建築の記念碑的マニフェストとして知られるが、「偉大な時代が始まった。／新しい精神がある」と書き出される「量産住宅」と題された章の冒頭では、「量産は分析と実験に基づく。／大工業は、建物を扱い、家の要素の量産を確定すべきである²⁰」と記されている。むろんこの「分析と実験」に基づく量産体制とは、この章で実際に言及されるようにテイラー・システムに他ならず、これによりル・コルビュジェのドミノ・システムの住宅を量産することが「新しい精神」の現れであり、「偉大な時代」の幕開けの契機になるという宣言である。そもそもこのドミノ・システムは 1910 年代の半ばにル・コルビュジェがすでに提唱していた建築の構造手法であるが、これ自体たんなる理論上の産物ではなく、戦時中に破壊された住宅を迅速に再建する目的で考案され、戦後も大量生産によるドミノ住宅を国家の再建に供することが模索されたという背景を持っている²¹。しかもル・コルビュジェの場合、このような方向性は政治的射程をあらかじめ備えていた。実際、上で見た「量産住宅」に続く『建築へ』の最終章ではこのような方

¹⁸ フォーディズムに対する医師としての肯定的関心と作家としての批判的眼差しとの二重性は、セリーヌ研究において度々問題にされてきた。Philippe Roussin, « Destouches avant Céline : le taylorisme et le sort de l'utopie hygiéniste. (Une lecture des écrits médicaux des années vingt) », *Sciences sociales et Santé*, 1988, vol. 6, n° 3-4, p. 5-48 ; *id.*, « Getting Back from the Other World: From Doctor to Author », *Celine USA, The South Atlantic Quarterly*, spring 1994, vol.93, no.2, p.243-264 ; David Labreure, *op.cit.*, p. 144-146 ; François-Emmanuel Boucher, « Le docteur Destouches, le taylorisme et la nature du travail à l'époque de la Grande Dépression », Johanne Bénard, François-Emmanuel Boucher, Régis Tettamanzi et Bernabé Wesley (ed.), *Relire "Voyage au bout de la nuit"*, Presses de l'Université de Montréal, 2022, p. 261-280.

これらの研究では医学テキストと小説との対立が必ずしも絶対的なものではなく、医学テキストにもフォーディズムに対する批判的ニュアンスが汲み取れることが正当にも指摘されている。

ただしいずれも伝記的側面に比重を置いた立論になっているが、本稿が目指すところはこれらの研究を踏まえつつもセリーヌのエクリチュールの工学的側面に光を当てることにある。この時代のセリーヌの医学テキストを『旅』だけでなく『Y 教授』と関連付けるのはそのためである。

¹⁹ Mardges Bacon, *Le Corbusier in America: Travels in the Land of the Timid*, MIT Press, 2001, p. 6-7.

²⁰ Le Corbusier, *Vers une architecture*, Flammarion, coll. « Champs Arts », 1995, p. 187. [ル・コルビュジェーソーニエ『建築へ』樋口清訳、中央公論美術出版、2011 年、187 頁]

²¹ Mary McLeod, « "Architecture or Revolution": Taylorism, Technocracy, and Social Change », *Art Journal*, vol. 43, Summer, 1983, p. 135; Jean-Louis Cohen, « Introduction », Le Corbusier, *Toward an Architecture*, Frances Lincoln, 2008, p. 24.

向性が革命を抑止するものとしての建築という名高い命題に至ることになる——「建築か革命か。／革命は避けることができる²²」。『建築へ』が出版された 1923 年にはすでにソヴィエト連邦が成立していたわけだが、建築による住宅問題の抜本的な解決が、国力の回復だけでなく革命に至るような社会的対立を解消することにもつながるというヴィジョンをル・コルビュジエは強く抱いていたのである。

セリーヌの医学テキストにこのような政治的射程がどのような形で内在しているのかは詳細な検討が必要になるだろう。だが少なくともテイラリズムやフォーディズムを応用することで従来の手法を刷新し、これを第一次世界大戦からの社会の立て直しに役立てるという目論見に限っていえば、モダニズム建築を確立しようとしていたル・コルビュジエと国際連盟事務局保健部の専門職員だったセリーヌはおおよそ同じ方向性を共有していたと捉えることが可能であろう。そもそも社会衛生学は社会生活の様々な場面と関わりを持つものであるが、社会衛生の専門家としてのセリーヌが住居問題にも敏感であったことはここで指摘しておきたい。国際連盟に提出したフォード社における労働についての報告書を基に 1928 年にパリ医学会で行った発表には次のような一説がある。「そうした〔1 日 20 フラン以下の生活を余儀なくされている〕人々が街や自宅、あるいは命令に従ってなんらかの労働をしながら、工場にいるわけである。／《自宅》ということに関してであるが、住宅事情改善のために、いったい何が為されたであろうか？ 何ひとつ²³」。このような視点がなければ、例えば『夜の果てへの旅』におけるパリ郊外の不衛生街区の描写はまた違ったものになっていたはずである。だが公衆衛生の専門家としてセリーヌが嘆くこのような住宅政策の無策の裏側で、建築家や都市計画家の介入がまったく存在しなかったわけではない。実際、ル・コルビュジエは同時代において住宅供給問題にアメリカ式の科学的生産マネジメントというセリーヌ自身が関心を抱いていた手法に立脚する解決策を提示しようとしていたのである。

3. ニューヨーク

ル・コルビュジエが実際にデトロイトのフォード社を訪れるのは、すでにふれた 1935 年のアメリカ滞在中の 11 月 20 日のことである。ル・コルビュジエのアメリカ訪問を詳細に調査したマージェス・ベーコンの研究によれば、ル・コルビュジエはデトロイトに到着すると直ちにフォード社の工場の見学を求めたという²⁴。規格化が行き届いた工場において住宅の大量生産が可能になるかどうかを何をおいても確認したいというのがその目的だった。つまりル・コルビュジエは 1930 年代半ばにおいてもなお 10 年以上前に着想を得た「量産住宅」による住宅問題への介入に期待を抱き続けていたということになるだろう。従って、このアメリカ滞在を元に書かれた『伽藍が白かったとき』には当然のようにフォード社の訪問に割かれた「フォードについての考察」という章が存在している。ところがフォ

²² Le Corbusier, *Vers une architecture*, op.cit., p. 243. [ル・コルビュジエーソーニエ『建築へ』前掲書、230 頁]

²³ « À propos du service sanitaire des usines Ford à Detroit », *Cahiers Céline*, 3, op.cit., p. 150. [セリーヌ「フォード社における医療」磯野秀和訳、『セリーヌの作品 12』前掲書、349 頁]

²⁴ Mardges Bacon, op.cit., p. 102-103.

ード社を視察したル・コルビュジエは「建築家である私は、いわば茫然となってしまった²⁵」と打ち明けはするのだが、どうしたわけかフォード社の工場内の描写はわずか4ページほどのこの章の冒頭の1段落が割かれているにすぎない²⁶。しかも型通りの描写に終始しているだけである。「私は、流れ作業による車の組立を見た。日に6千台！ 間違いがなければ、45秒に1台だ。ベルトの端に、機械工が交代でつく。一人がすばやく乗って腰をかけ、動力のボタンを押す。見ているものは圧倒されて考える、『うまくゆかないだろう！ 動きやしないさ！』と。ところが**必ず**うまくゆくのだ」[229 ; 299-30 (強調原文)]。

その一方で『伽藍が白かったとき』の中心は何をおいてもニューヨークである。そもそもこのアメリカ滞在はニューヨーク近代美術館がスポンサーとなっており、このメガシティがアメリカ東部と中西部を巡る講演旅行の起点であった。実際、『伽藍が白かったとき』のアメリカ滞在記はニューヨークへの到着で始まり、全体のおおよそ4分の1にあたる70ページほどがマンハッタンについての考察に割かれている。もとより「アメリカの摩天楼は小さすぎる」[85 ; 100] という『伽藍が白かったとき』で表明された名高い主張自体がニューヨークに上陸した直後の記者会見でル・コルビュジエが発したものであった。このように『伽藍が白かったとき』におけるル・コルビュジエの関心は、住宅よりも都市あるいは都市計画に比重が移動していることは容易に見て取ることが可能であろう。その中心にあるのがニューヨークなのだ。ル・コルビュジエは摩天楼の威容を「仙境的破局 *la catastrophie féerique*」[127 ; 155] と形容するのだが、この表現には先に引いた「アメリカの摩天楼は小さすぎる」と同様に撞着語法が用いられている。実際、ル・コルビュジエのアメリカとニューヨークに対する立場はある種の矛盾を孕んだものであった。

メリー・マクラウドに従えば²⁷、1930年代になると、アメリカの機械産業をモデルにドミノ住宅を大量生産することで建築が社会的力を発揮できることを見込んでいた20年代の楽観主義は後退し、ル・コルビュジエは「建築か革命か」ではなく「建築と革命」という戦略上の転換を強いられることになる。実際、建築だけでは目指す社会改革を達成できないことが徐々に明らかになり、ル・コルビュジエはネオ・サンディカリストのグループに接近し『プラン』(1931)などの雑誌を創刊することになる。このグループのイデオロギイ的立場には反米主義が色濃く滲んでおり、特に物質文明が精神生活の豊かさを損なうという当時のフランスにおけるアメリカ批判に特徴的な論点が顕著だった。だが

²⁵ Le Corbusier, *Quand les cathédrales étaient blanches*, Bartillat, 2012, p. 229. [ル・コルビュジエ『伽藍が白かったとき』生田勉・樋口清訳、岩波文庫、2007年、299頁]以降、本書からの引用は本文中で原著・邦訳の順で出典のページ数のみ示す。

²⁶ ル・コルビュジエがフォード社における労働実態に眼を向けなかったことについては、例えば以下を参照のこと。David Gartman, *From Autos to Architecture: Fordism and Architectural Aesthetics in the Twentieth Century*, Princeton Architectural Press, 2009, p. 81-82. なお本書はアメリカにおける大量生産品の受容とモダニズムの建築家たちの熱狂との間の隔たりに着目しながら、フォーディズムがル・コルビュジエを初めとするヨーロッパのモダニストに与えた影響を論じている（とりわけ第2章と第3章）。

²⁷ Mary Mcleod, « Le rêve transi de Le Corbusier : L'Amérique "catastrophe féerique" », Jean-Louis Cohen et Hubert Damisch (ed.), *Américanisme et modernité. L'idéal américain dans l'architecture*, EHESS/Flammarion, 1993, p. 209-210.

一方でその物質文明を生み出す生産体制を放棄するところまでは射程になく、むしろ機械産業をコントロールしつつ資本主義を乗り越えることが課題になっていた。つまり 1930 年代のル・コルビュジエはこのようなイデオロギー的に両義性のある眼差しをアメリカに向けていたのである。しかもニューヨークについては、自身の都市計画家としての立場がこのようなイデオロギー的立場にさらに一種の屈曲を付け加えることになる。なぜならマンハッタンに聳え立つ摩天楼は、彼の都市計画における中心的な手法でもあったからだ。実際、ル・コルビュジエは 1922 年のサロン・ドートンヌに出展し話題となった「300 万人の現代都市」から、これをパリに適用した 1925 年の「ヴォアザン計画」を経て 1930 年の「輝ける都市」に至るまで、都市の稠密な中心部に高層建築群を配置することでオープン・スペースを生み出し、これを中心に都市の秩序を生み出すプランを展開してきた。これを踏まえれば、ル・コルビュジエには自身の都市計画を引き立て、場合によってはアメリカで自身の計画案を実現するためにも、摩天楼が林立するマンハッタンを全面的に肯定することは難しかったのである。むしろある種の熱狂がル・コルビュジエのニューヨーク観の根底にはある。例えば『伽藍が白かったとき』においてル・コルビュジエは次のように述べる。「人間がその力とすべてを空中に計画した——大空に都市を建設した——のは、これが初めてである。なんという混乱、なんという熱狂であろうか！ すでになんという完成、なんという前途であろうか！」〔74；86〕だがこの熱狂は失望と表裏一体となっているのであり、ル・コルビュジエのニューヨーク体験は次のような二つの極の間で揺れ動くことになる。「都市（ニューヨークあるいはシカゴ）の暴力の中にいるときの絶望の数時間、そして仙境的壮麗さの中にいる時の感激と信頼と楽観の数時間」〔72；82〕。このような二面性が集約されているのが先に引いた「仙境的破局」という表現に他なるまい。

このようにル・コルビュジエのニューヨークに対する立場は様々な屈曲が折り重なっているのだが、『夜の果てへの旅』におけるセリーヌの立場はむしろより単純な整理が可能のように思われる。すでに見たとおり、『旅』執筆と同時期の医学テキストにおいては基本的にフォード社の医療体制への肯定的な評価が保持されていたが、小説になるとこれが否定的な評価へと反転する。セリーヌの医学テキストにはニューヨークの描写は含まれてはいないのだが²⁸、デトロイトのフォード社同様、『旅』はニューヨークに驚嘆しつつも批判的な視点から描き出す。

おそらくなれた連中は、この物質と商売の巣窟を目の前にしても、僕みたいな感慨はこれっぽちも抱かないのでは？ このすみずみまでの無限の組織化に対しても？ この宙づりの大氾濫も、彼らの目には、たぶん、安定として映じるのだろう。ところが、僕にとっては、それは煉瓦と、廊下と、錠前と、窓口からできた、忌まわしい強制組織、巨大な、逃れのない建築の拷問以外のなにものでもなかった。〔197；330-331〕

²⁸ ライヒマンに宛てた書簡では以下のようなニューヨークの所感を述べている。「見るものすべて何にも似ておらず、戦争のように常軌を逸しています」（Lettre à Ludwig Rajchman du 24 février 1925, *Lettres, op.cit.*, p.260）。

この引用でまず目を引くのは「この物質と商売の巣窟」という表現であるが、これはすでにふれた、ル・コルビュジエも共有していたフランスの反米主義の常套句のひとつであった。それと同時に「宙づりの大氾濫」や「建築の拷問」という表現に見られる都市批判はル・コルビュジエの摩天楼観と対比させることが可能かもしれない。だがこれもまずは当時のフランス知識人によるアメリカ批判の主要なテーマの表現として読まれるべきものであるだろう。フィリップ・ロジェによれば、「アメリカの大都市は、もはやたんなる野暮な装飾ではなくなる。大都市は——〈機械〉でもって、そして部分的には同じ理由で——、満場一致で非難されるこの「文明」に固有の非人間化の主演となる²⁹」のである。このように『旅』におけるニューヨーク観はほとんど曇りのない反アメリカ主義によって貫かれていると言うことが可能であろう³⁰。

4. 地下の発見／不在

20年代においてはとりわけアメリカの機械産業への関心を通じてむしろ近い場所にいたセリーヌとル・コルビュジエだが、これまで見てきたように、30年代になると徐々に二人の間の差異が際立ってくる。『旅』のセリーヌが社会衛生を手放すのとは異なり、むしろル・コルビュジエが都市計画を手放すことはない。むしろアメリカを告発すると同時にアメリカをひとつの参照項とする都市計画モデルを練り上げ都市の悲惨と無秩序を解決する道を模索するだろう。このような差異を踏まえた上で、『夜の果てへの旅』と『伽藍が白かったとき』を対比させるとすれば、そしてとりわけそうすることでセリーヌのエクリチュールの都市工学的側面を浮かび上がらせることを目論むのであれば、どのようなテーマに焦点をあてればよいのだろうか。

もちろん二人のニューヨークの描写は様々な点で比較可能であろう。だがここでは改めて「アメリカの摩天楼は小さすぎる」というル・コルビュジエの主張に立ち返りたい。この主張から読み取れるのはニューヨークがモデルであると同時に批判の対象でもあるという屈折した認識だけでなく、すでに見たとおり、高層建築こそが彼の都市計画において枢要な位置を占める技法であるという年来の立場に他ならない。ル・コルビュジエは別の箇所で自身の都市計画思想における摩天楼を「デカルト的摩天楼は、機械文明時代の都市計画の奇跡である」[87; 103]と評価するのだが、「ニューヨークの摩天楼は、私がデカルト的摩天楼と呼ぶ合理的な摩天楼にとっては迷惑な存在である」[86; 101]と断罪する。つまりアメリカの摩天楼の失敗の原因はたんに「小さすぎる」ことにあるのではない。都市に合理的な秩序を生み出すことに失敗したからこそ「都市計画の軌跡」であることを逸したのである。ある箇所でル・コルビュジエはマンハッタンの摩天楼について次のように述べている。「偉業の完成、それはその下における都市の死であった。敷地は殺されてしまった。理性は途方にくれた」[90; 109]。

²⁹ フィリップ・ロジェ、前掲書、570頁。

³⁰ ただしセリーヌにおいては反米主義が突出しているわけではない。すでに引用したライヒマン宛の書簡で「戦争に降参するみたいに騒音に降参しているのだ」という表現に見られるように、ニューヨークは「戦争」と同質の経験として認識されており、とりわけ『旅』においては第一大戦の戦場や銃後のパリ、植民地や郊外が全て同じ世界観によって通底しているという認識があることを忘れるべきではないだろう。

ル・コルビュジェの都市計画の基本は、都市の中央に高層建築からなるスーパーブロックを配し、高層化によって生み出された地上のスペースを緑地帯とし、自動車と歩行者の道路を分けた上でこれらを整然と整備し幾何学的秩序を生み出すものであった。このような理想に対して、ニューヨークの摩天楼の足元には混乱と無秩序しかなく、それはル・コルビュジェにとって「都市の死」以外の何ものでもなかった。摩天楼が都市問題の解法であるとしたら、それはこのような混乱の解消の手立てでなければならないのだ。もとよりル・コルビュジェはこのようなニューヨークの摩天楼批判を 20 年代から行っている。例えば 1925 年の『ユルバニスム』には次のようにある。「ニューヨークは必要な道路網を用意せずに狂ったように人口密度を高めるゆえ、ニューヨーク式の摩天楼はうまくゆかない。ニューヨークは間違っている、そして摩天楼は権利を失わない³¹」。

『伽藍が白かったとき』においてル・コルビュジェが指摘するような「都市の死」の描写はセリヌの『旅』の随所に登場するものだ。例えば「僕の選んだ通りは、たしかにいちばん狭い通りでフランスの大きな溝くらいの幅しかなく、そこは汚物をたたえ、じっとり湿気ていて、暗がりであふれにまみれていた」〔184 ; 309〕。これがル・コルビュジェが非難する「理性が途方に」くれる光景であることは容易に見て取れるであろう。セリヌにおいて興味深いのはバルダミュがこのように地上に目を向けるだけでなく、ましてや摩天楼のさらなる高みを渴望するのでもなく、むしろ逆の方向をたどりまた別の次元を発見することであるように思われる。その次元こそが「地下」である。もちろん『旅』におけるこの地下の発見は『Y 教授との対話』で語られる「感動の地下鉄」の端緒となるものである。

「僕の座っていたベンチの右手には、歩道の表面に、ちょうど、故国の地下鉄のような、大きな穴が一つあいていた」〔188 ; 314〕。はたしてこの穴の先には何があるのだろうか。

その地下室は、彼らが生理的欲求を満たしに出かける場所だったのだ。〔…〕その薄暗がりの中で男たちがズボンをずらし、自分たちの悪臭の真っ只中で、野蛮な音とともに、顔を真赤にして、人前もはばかりず汚いしろものを押し出す作業に余念がない。〔188 ; 315〕

つまり公衆トイレである。バルダミュによるこのような地下の発見は、我々がこれまで辿ってきたセリヌのエクリチュールの工学的側面という問題系においていくつかの興味深いパースペクティブを開いてくれるだろう。まず指摘しなければならないのが、ル・コルビュジェにおける地下の不在である。『伽藍が白かったとき』のニューヨークの描写だけでなくもとよりル・コルビュジェの都市計画思想自体に地下という次元がほとんど欠如しているように思われる。例えば 1935 年の『輝ける都市』には「デカルトはアメリカ人なのか？」という章があり、そこで自身の計画案における地下の利用に言及することがあるものの、それもほとんど副次的な扱いにとどまっている³²。また『伽藍が白か

³¹ Le Corbusier, *Urbanisme*, Flammarion, coll. « Champs Arts », 1994, p. 174. [ル・コルビュジェ『ユルバニスム』樋口清訳、1967 年、173 頁]

³² Le Corbusier, *La Ville radieuse*, Éditions de l'Architecture d'Aujourd'hui, 1935, p. 133. [ル・コルビュジェ『輝ける都市』白石哲雄監訳、河出書房新社、2016 年、132 頁]

ったとき』にも、否定的にはあるが、ニューヨークの地下鉄への言及がごくわずかに存在している〔72；83-84〕。しかし総じてル・コルビュジエが地下を都市計画の手法として積極的に語ることはむしろ稀である。もちろんル・コルビュジエがモータリゼーションを前提にしていたということはあるだろう。だがもとより地下はル・コルビュジエの都市計画において積極的な意味付けを持ちえないのではないだろうか。例えばル・コルビュジエが実質的に執筆したと言われる、CIAM（近代建築国際会議）の第4回大会の決議をまとめた『アテネ憲章』でも新たな都市計画の原理として建物の超高層化により生み出されるオープン・スペースを緑地化することが掲げられている。これにはたんなる景観上の配慮だけでなく、都市の空気を浄化する目的があった。またオープン・スペースによって建物の配置に自由度が増すことで、それによって採光が改善されるという利点もあった³³。『アテネ憲章』でも強調されるように、ル・コルビュジエの都市計画の原理では都市の衛生面での改善にも大きな配慮が払われていたのである。ところが地下とは深く降れば降るほど緑や清浄な空気や太陽の光とはかけ離れていく空間であるはずだ。地下が持つこのような特性故にル・コルビュジエに地下への言及が少ないのはむしろ当然のことなのではないか。

このようにモダニズムの都市計画が衛生的な環境の実現をその原理のひとつとして掲げるとしたら、もちろんそれは近代化を遂げていく19世紀以降の都市が根本的に不衛生だったからに他ならない。パリの不衛生問題はバルザックやユゴーあるいはゾラを始めとする19世紀文学を貫いて伏流するひとつのテーマをなしているが、この流れは20世紀前半のシリーズにも見出すことが可能である。最も典型的なのが『夜の果てへの旅』におけるパリ郊外の低所得者が住まう街区の描写であろう。「ランシイの空の光は、デトロイトそっくりだ、ルバロアからこっち平野一面に氾濫した煤煙の濁水。廃物のような建物が黒いごみで地面にしばりつけられている。長短とりどりの煙突は、遠くからは、海辺の泥土の中に突き立った太い杭みたいだ。その中に、僕らがいるのだ」〔230；下7〕。他にもシリーズの少年時代に取材した『なしくずしの死』では、不浄な空気による窒息状態の描写が執拗に繰り返されることに驚かされるが、不浄な空気だけでなくパリの不衛生が集約されているのが、主人公一家が住むパサージュである。知られるように、ベンヤミンは「パリ19世紀の首都」においてパサージュをモデルに19世紀のパリがいかにか商品のファンタスマゴリアとして形成されているのかを示したが、シリーズにおいてパサージュとは都市の不衛生のモデルに他ならない。

じっさい小路の不潔なことと言ったら正直信じられないくらいで。野良犬どもの大小便や、痰やガス洩れに囲まれて、じわじわと、だが確実にくたばってゆく、そういう場所だった。監獄中よりもっと悪臭ふんぷんだった。アーケードのガラス天井の下までやってくる太陽の光は蝋燭一本で消しちまえるほどしょぼい。みんなが息が塞まると言い始めた。小路の人々は俄然そのいまわしい窒息状態を意識するようになった。寄るとさわると田舎や山や谷や、自然の素晴らしさ

³³ Le Corbusier, *La Charte d'Athènes*, Seuil, coll. « Points Essais », 1957, p. 47-54. [ル・コルビュジエ『アテネ憲章』吉阪隆正訳、鹿島出版会、1976年、74-80頁]

の話ばかりした……³⁴

このような不衛生の描写を前にしてはたして都市計画家はどのような反応を示すのであろうか？セリヌが興味深いのは、たんにこのような現実をテキストの内部で描写するだけでなく、実際に工学的あるいは都市計画的な介入を提案する点である。実際、このパリの不浄な空気のオブセッションは1937年の『皆殺しのための戯言』ではもはやフォーディズムをモデルのひとつとする社会衛生によって解決を図る問題ではなく、一種の都市計画案の提示として現れることになる。『戯言』によれば、「世界中で、もっとも不衛生な、もっとも身動きならぬ、もっとも融通のきかぬ、荒れ放題の、風通しの悪い、どうしようもない街、それが、丘の首環にしめつけられたパリなのだ！³⁵」。このような不浄な都市に対してセリヌが提案するのが、「セヌ川を海まで、幅も深さも三倍にひろげ」、これに合わせて「海に向かう道路を拡張³⁶」する計画である。

海から遠い首都というのは、おぞましい毒ガス部屋、断末魔のペール＝ラシェーズ墓地だ。われわれに必要なのは《都市計画》なのではない！……もはやまったく、都市計画は問題にならない。郊外というものは、整理するだけではだめなのだ。それをぶちこわし、粉碎せねば。街のなかの汚物を何もかもかかえこんで保存するような郊外なんぞ、病毒伝染の首かせとなる。誰もかれも、街中が海に行くことだ！……田舎という動脈で、上質の血を作り直し、自然のなかで、風に吹かれ、波しぶきに触れ、街のすべての汚辱、糞便を雲散霧消させるのだ。 […] 人類を、その頽廃した悪徳、都会から治癒すること……³⁷

『戯言』のこの提案は実に壮大な計画ではある。けれども着想自体は必ずしも独自のものではなく、工業化によって蹂躪された都市を自然と対置させる1920年代から30年にかけてのフランスの反都市思想の流れに位置づけうるものであるだろう³⁸。また海による都市の浄化という発想もセリヌ以前に存在しなかったわけでもないようだ³⁹。だがセリヌのエクリチュールの工学的側面を問題にする我々にとって見逃せないのが、都市計画による人為的なコントロールの割合を少なくし自然との接触によって都市を浄化するという『戯言』のこの発想には、地下という次元がいささかも関与していな

³⁴ *Mort à crédit, Romans. 1936-1947*, Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 2023, p. 59. 『なしくずしの死』上巻、高坂和彦訳、河出文庫、2002年、94頁]

³⁵ *Bagatelles pour un massacre, Écrits polémiques*, Éditions 8, 2012, p. 221. 『虫けらどもをひねりつぶせ』片山正樹訳、『セリヌの作品10』国書刊行会、2003年、265頁] なおタイトルについては、『皆殺しのための戯言』を本論考では使用する。

³⁶ *Ibid.*, p. 220. [同上、264頁]

³⁷ *Ibid.*, p. 222. [同上、266頁]

³⁸ Bernard Marchand, *Les Ennemis de Paris. La haine de la grande ville des Lumières à nos jours*, Presses universitaires de Rennes, 2009, p. 134-135.

³⁹ Jean-Pierre A. Bernard, *Les Deux Paris. Les représentations de Paris dans la seconde moitié du XIXe siècle*, Champ Vallon, 2001, p. 88-91.

いことである。このような解決策は『旅』で描き出されるニューヨークやパリのような都市を浄化するかもしれないが、ここから『Y 教授との対話』で語られる「感動の地下鉄」の文体ははたして導き出されるだろうか。

5. 「入口に洗面台を」

ここに改めて「地下」というテーマを導入するために、ナディール・ライージと D・S・フリードマンによる「シンク (sink) にて——アブジェクションの建築」を参照しよう。ライージとフリードマンはル・コルビュジエの建築を「『衛生の君臨』についての詩⁴⁰」であると主張する。この主張の出発点になっているのが、ル・コルビュジエの代表作のひとつであるサヴォア邸のエントランスにある流し台の存在である。なぜ洗面などするはずのない住居の入口付近にシンクが配置されているのだろうか？ ライージとフリードマンは、このシンクが衛生を視覚的に象徴する記号であることを強調する。また同時にこれがシンクであるが故に「《サヴォア邸》のエントランス・ホールの構成におけるシンクの視覚的ステータスは、それが作動する設備であるという事実に帰着しており、清潔な水は中、汚染された水は外という、衛生の官僚主義に結びついている。つまり、これは建築なのだ⁴¹」と述べる。つまりサヴォア邸のシンクはこの住宅で実現される衛生的な環境を視覚的記号として来訪者に印象付けるのと同時に、「汚染された水」が抑圧され流しだされる「外」が存在していることを暗に示しているのである。もちろんこの「外」とは実際には不浄がシンクをつたって落下していく「下」ということになるだろう。だとすればル・コルビュジエにおいては単体の建築作品だけでなく彼の都市計画においても不浄は解消されるだけでなく地下へと落下していく対象でもあると捉えることが可能なはずである。ならば『伽藍が白かったとき』に地下が不在なのは自然な成り行きであろう。このテキストにおいてもモダニズム建築における「衛生の官僚主義」が作動しているのだ。この場合、ル・コルビュジエが理想とする摩天楼とはある意味、サヴォア邸のシンクのように機能する視覚的記号でもあると言えはしまいか。むしろ『夜の果てへの旅』でバルダミュが発見する地下はまさしくこの「衛生の官僚主義」が排除する「汚染された水」が流れる「下」の光景に他なるまい。バルダミュはいわばモダニズム建築が視覚的記号によって蓋をしたはずの「地下」に降り立つのである。

このような不浄が落下していく場所としてのセリーヌにおける地下について、ピエール・マシュレは以下のように述べている。「深淵の底にあるのははっきりした確信ではなく、絶対的な汚辱と嫌悪のほうに絶えず引き降ろそうとする無限の落下運動である。ひとは滑稽でグロテスクな深淵に逃れるが、そこでは人間のうぬぼれが呑み込まれ、崩壊し、失われ、そして文字どおり沈んでいく。／とこ

⁴⁰ Nadir Lahiji and D. S. Friedman, « At the Sink: Architecture in Abjection », Nadir Lahiji and D. S. Friedman (ed.), *Plumbing. Sounding Modern Architecture*, Princeton Architectural Press, 2009, p. 37 [ナディール・ライージ+D・S・フリードマン「シンク (sink) にて——アブジェクションの建築」五十嵐光二訳、『10+1』n° 14, INAX 出版、1998 年、101 頁]

⁴¹ *Ibid.*, p. 41. [同上、105 頁]

ろでセリーヌはこの深層のなかに地下鉄、つまり交通機関を走らせる⁴²。だが『旅』の段階ではこのような地下はまだセリーヌのエクリチュールの生成に関与してはいない。なぜならバルダミュは、マシュレがここで言及するような地下鉄をまだ見出してはいないからである。地下鉄発見の経緯が語られることになるのが『Y 教授との対話』である。『Y 教授』においてセリーヌは、パスカルがヌイイ橋で深淵の存在の啓示を得た有名なエピソードを引きながら次のように述べる。「パスカルと同じ恐怖をね！……深淵の感覚を！……もっとも私の場合はヌイイ橋じゃない……そうじゃなく！地下鉄で経験したんだ」〔535；242〕。ここで言及されるパスカルの「深淵」はル・コルビュジエの「デカルト的摩天楼」と対比的に論じることが可能であろう。だがここではパスカルが17世紀のパリで乗合馬車の都市交通システムを考案したエンジニア的哲学者でもあったことを忘れるべきではないだろう。それにもましてここで我々にとって興味深いのが、セリーヌが現代の都市交通システムのひとつである地下鉄で向かう先である。

あっちこっちで診察してたんだ……殆ど毎朝イシーへ行って、工場で診察しなけりゃならなかった……ところが住まいはモンマルトルときてる！……考えても見給え！……毎朝だぜ！……ピガール＝イシー間を！〔…〕最良の方法は何か？……地下鉄？自転車？バス？〔…〕それとも徒歩で？……迷ったのはそこなんだ！〔…〕あの暗い地下鉄にするか？薄汚くて悪臭ふんぷんだが、便利ではあるあの深淵に？……くたびれ果てた連中を呑み込むあのでっかい穴に？……〔535；243〕

このようにセリーヌは自宅のあるモンマルトルから診察のために郊外の工場へと向かう地下鉄の中で改めて「地下」という次元を発見するのである。この工場での診察が具体的にどのようなものだったのかは詳らかになっていないのだが、すでに見たとおり、この時期のセリーヌはデトロイトのフォード社で得た知見に基づく医療改革を唱えていた。これを踏まえれば、セリーヌはル・コルビュジエとの接点のひとつでもあった同時代のアメリカの生産様式への関心を社会衛生に応用することを目論みながら郊外の工場での医療活動に向かっていたはずだ。ところがそのために選んだ都市交通システムである地下鉄で「薄汚くて悪臭ふんぷん」とした「地下」という次元を発見し直したということになるだろう。しかもセリーヌがモンマルトに引越した1929年は、『夜の果てへの旅』の執筆がちょうど始められた時期でもあった。しかも今回の「地下」の発見は自身のエクリチュールと結びつき、『Y 教授との対話』において明示されはしないものの、実際に『旅』が書かれることになるという時系列が浮かび上がるだろう。

その一方で『Y 教授との対話』において地下鉄はル・コルビュジエならば建築的に覆い隠すであろう不衛生な「地下」であるだけではない。実際に交通問題に対処するための「便利ではある」移動手

⁴² ピエール・マシュレ「深淵のレトリック セリーヌの魔法の地下鉄」『文学生産の哲学』小倉孝誠訳、藤原書店、1994年、160頁。

段としても描かれていることに注意を促しておきたい。そもそも地下鉄自体、技術革新がもたらしたたんなる移動手段ではなく、19世紀からパリが抱える交通問題を解決することを期待された公共交通システムだった⁴³。先ほどの引用ではセリーヌが郊外の工場に地下鉄で向かっていたことが回想されていたが、セリーヌがY教授と対話する1950年代のパリも依然として交通問題に喘ぐ都市として描かれている。Y教授ことレゼダ大佐はセリーヌの対話相手になることでガストン・ガリマールに取り入ろうとしており、テキストの後半では二人がタクシーに乗り込んでアール・ゼ・メティエからセバスチャン・ボタン通りのガリマール社に向かう様子が例えば以下のように描き出される。

タクシーは発車する……〔…〕 あっ、だけど奴のおしっこは？……ところで？おしっこは？……クッションを？車をびしょ濡れにしちゃうんじゃないかな？……とても見る気にはなれなかった……ひどいのろのろ運転だった……トラックのラッシュだ……中央市場なんだ！……ほとんど1メートル毎に停車！……赤信号！……よし！……とにもかかわらずシャトレまで辿り着いた……〔549 ; 261〕

このように『Y教授』ではセリーヌ自身がレゼダ大佐を伴ってタクシーに乗り込み、都市交通の混乱を実際に経験するという演出が施されているのである。ここで描き出されるのも、ル・コルビュジエが「都市の死」と呼ぶような事態のひとつに他なるまい。しかも興味深いことに、ここには交通渋滞だけでなくル・コルビュジエならば「理性が途方に暮れる」と形容するようなもうひとつの光景が重ねられてもいる。この引用以外にも繰り返し描かれるレゼダ大佐の尿意のエピソードは、まさしくニューヨークの地下でバルダミュが目撃し、ル・コルビュジエがシンクという視覚的記号によって蓋をしようとする不衛生の光景に連なるものであろう。しかも錯乱したレゼダ大佐は自身の汚穢を洗い清めるかのようにシャトレ広場の噴水に飛び込み水浴びを始める。「奴は服を脱いでいた！……そこで水浴びする気だったんだ、裸で！噴水の中で！」〔549 ; 262〕。そしてレゼダ大佐のこの錯乱もあり、二人はタクシーでの移動を断念し徒歩でガリマール社に向かうことになる。だが徒歩であっても地表が混乱していることに変わりはない。「先へ進む……よたよただったが、とにかく先へ進む！……〔…〕 こんなふうにはふらついてたんじゃバスの下敷きになりかねない……何せ獐犢なバスがぶんぶん通ってるんだから！」〔554 ; 268〕。

面白いことに、『Y教授との対話』は17世紀に血液循環論を唱えたウィリアム・ハーヴェイへの言及で終わっている。これは自身の文体論を展開したこのテキストが異端視されるのではないかという危惧を表明するための言及ではあるのだが、セリーヌがY教授とともにパリの劣悪な交通事情に直面し、またセリーヌが自身の文体を地下鉄に準えることを踏まえるならば、この言及は円滑な都市交通のあり方を喚起するものでもあると言えはしまいか。実はル・コルビュジエも彼の都市論において心臓や肺などの内臓器官を引き合いに出し、テキストにその図版を掲載することがある。例えば『ユル

⁴³ ベルナール・マルシャン『パリの肖像 19-20世紀』羽貝正美訳、日本経済評論社、2010年、161-174頁。

バニスム』は都市を構成する様々な要素の有機的連関や循環を示すために、生物学の本から引用した心臓や肺などの臓器の図版を示す補遺が巻末に付されている⁴⁴。ル・コルビュジエの場合、もちろん「デカルト的摩天楼」という「機械文明時代の都市計画の奇跡」を実現することで都市の諸要素の合理的な連関とサーキュレーションを確保し、都市の健康を取り戻すことが目指される。一方セリヌは「書き言葉を通して《話し言葉》の感動を取り戻す」〔498 ; 196〕エクリチュールによって地表のすべてを積み込んで地下に設置した交通網を走り抜けることを宣言する。

一切合財だ！……八階建てのビルも！……唸りを上げる獐猛なバスも！〈地表〉には何ひとつ残してやらない！残してやるもんか！モーリスの広告塔も、しつこい娘たちも、橋下のモク拾いも！残すもんか！全部連れ去っちゃう！〔…〕感動に向かって行くんだ、大佐！……息詰まるような感動に！〔537 ; 245〕

このようにセリヌのエクリチュールはサヴォア邸の建築家のように地表に都市の秩序を確立するのではなく、おそらくは最新型の建築も機能不全の地上交通システムも、消費社会の誘惑も貧困もすべて積み込んで感動によって作動するひとつの交通システムを地下に確立しようとする。ここに文学による都市問題への介入の特異な例を見出すことができはしまいか。冒頭で見たように、セリヌによるエクリチュールの探求は「クロゴルド王の伝説」に代表される小品群が失敗に終わったことによって動機づけられるとして、そのエクリチュールのある種の側面はこのように同時代の都市の経験のなかから練り上げられたのである。だがここにあるのはたんに生活者としての受動的な都市の経験ではない。このエクリチュールは都市に対する積極的な働きかけへと発展するような視座を内包している。しかもこのようにして練り上げられたセリヌのエクリチュールは、とりわけ公衆衛生の専門家としての実践を介して同時代のモダニズムの都市計画と接近しつつも、これと競合するような工学的側面を有しているのである。だがセリヌのエクリチュールに都市計画的側面があるとして、このエクリチュールは——病院の入口に洗面台を設置せよと命じたあのゼンメルヴァイスのように——ひとつの健康の実現を目指すのであろうか？ それともたとえ混乱した地上とは異なる円滑な交通が実現されるとしても、それが地下であるが故にセリヌの工学的エクリチュールは「『衛生の君臨』についての詩」に抗い続けるのであろうか？

* 本研究は JSPS 科研費 22K00445 の支援を受けたものです。

⁴⁴ Le Corbusier, *Urbanisme*, op.cit, p. 267-273. [ル・コルビュジエ『ユルバニスム』前掲書、282-288 頁]